

2010年度共同研究報告

ライフスキルを中核とした短期大学における
初年次教育の研究

東 聖子

序

人間は社会的な動物である。現代社会において、女性も高等教育を終えたのちは仕事というものを通して社会的な存在となってゆく。哲学的に仕事とは何かについて、かつてヘーゲルは「労働は自分がそこに現れるもの」と語り、また「労働は実践的な教養である」とも述べている。それに対して、マルクスは資本主義に関連して「労働が労働者を疎外する」と語った。労働にはプラスとマイナスの名言が存在する。

*

それはともかくとして、1951年に日本の短期大学教育制度が始まり、高度成長とともに一定の社会的使命を果たしてきた。それから60年後の現在、経済のグローバル化、世界同時不況、少子高齢化社会、そして未曾有の3.11.東日本大震災等を背景として、このアジア文化圏の端の日本における短大生たちは、いまやまことに厳しい社会に出てゆくにあたり、どんな心と体と理性についての装備をしてゆけばよいのだろう。

平成23年1月31日の中央教育審議会の答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」においても、今後の日本は「新成長戦略」下にあって、産業構造が変化したため、アカデミズムにとらわれずに経済成長を支える人づくりをすること、生涯にわたる学習と職業生活の両立をすること、また教育の実務的な質保証のことなどが盛り込まれている。

学生たちが出てゆく近未来の社会や時代は、まさに予測不可能であり、われわれがその答え

を与えることはできない。世界的にもまた日本においても、競争から共生による繁栄の時代、人間回復の経済学の時代、グローバルにフラット化する社会という、これまでとはちがうパラダイムの時代に突入することになろう。そんな混迷の中で、学生たちにはどんな時代が来ようとも、未来に挑戦できるしなやかに生きる力をスキルとして身につけてほしいと考え、生涯にわたって役にたつ、WHO提唱のライフスキル教育の短期大学バージョンを、今回の共同研究のテーマとした次第である。

本稿は、2010年度の十文字学園女子大学共同研究として、短期大学部全専任教員がメンバーとなって、研修・調査・議論・授業展開などを行ったプロジェクト研究の報告書である。本短期大学部文学科（国語国文専攻・英語英文専攻）は2012年度に約38年の文学部の歴史を終え、国際化の時代に相応しく、また私学としての建学の精神に合致した<表現文化学科>に改組する予定である。そこにおいてライフスキル教育を、新学科の新しい特徴的な授業形態に組み入れたいと考えている。

*

本研究報告の構成は、以下の通りである。

<ライフスキルを中核とした短期大学における初年次教育の研究>

序

- I 短期大学におけるライフスキル教育の必要性—定義と歴史—
- II 2010年度実践報告：短大生のためのライフスキル教育—成果と可能性—
- III 2012年度<表現文化学科>におけるライフスキル授業—指導案—
- IV 日本の女子大学のキャリア教育と初年次教育
- V 海外のキャリア教育やライフスキル教育

結語

- ◆ライフスキル研修会参加一覧と参加報告
- ◆参考文献